↘ 長崎撮影を始めた1972年当時目にしていたのは、戦前の炭坑の悲惨な状況や、石牟礼道子の本などからの引用でした。初めて立つ長崎で、自分が感じた事にシャッターを押し写真を撮ってきました。その中で、いろんなものと出会い感じた写真があります。

目覚町　被爆者の家族

今回、撮影者別から撮った場所、事柄別に変換するに当たって、撮影地や写されたものは、スキャンした時に作った目録に収録されたメモや、ネガケースに記された内容を手掛かりに、サイボーズに上がっているベタの１コマ１コマを拡大して、現代の市内の地図、それと大出さんが見つけてくれた長崎県立図書館の「昭和31年の長崎地典」を見ながら、写真がどこで撮られているかなどを特定していきました。

このセレクトを通じて長崎で何を撮ろうとし、どういうことに関心を持ったかが掴めてきました。今後は第２次長崎や第３次、第４次の写真を重ね長崎で撮った写真の全容を浮かび上がらせたいです。

丸山　花月

「半世紀前の谷中村写真展」の感想ノートから

足尾鉱毒事件田中正造記念館に於いて現在開催中の「半世紀前の谷中村写真展」には多くの方々から感想をいただいています。一部を御紹介します。

5月9日

福岡県立戸畑高校の6年先輩である「一般社団法人もう一つの写真記録」の東　闊さんから案内を頂きやってきました。1960年代－70年代の学生の眼がとらえた写真に、同世代の者として大変共感を覚えました。谷中村の問題からははるかに時間が過ぎても、成田空港や筑波研究学園都市でも農民たちに国家権力が立ちはだかって土地を奪うことになりました。今後も同じようなことが繰り返されるかもしれません。「公共の福祉」という言葉は権力者が都合よく使っているような気がしてなりません。

桐生市　S氏

5月11日

「半世紀前の谷中村写真展」のご案内ありがとうございました。関心のある研究仲間に差し上げ、見学して頂くように努めたいと存じます。

写真展、谷中村の跡地を訪れた時のことを思い起こしながら見させて頂きました。谷中村民の苦しみ、しかし、その運命を乗り越える被害民のエネルギーが活写されており、深く感動。あらためて「写真」の持つ力に思いを致しました。ますますのご活躍を念じあげます。

「足尾鉱毒事件田中正造記念館2024年度総会」記念の日に

安在邦夫

事事物物

鈴木八千代さんは今ピースボートで世界一周の旅に出かけています。そこでは基町の写真を個人の企画として見てもらっています。そこで知り合った人がご主人にAAJPSのホームページを見てもらいました。脚本家のご主人からの感想です。

船内での基町のスライド上映

「もう一つの写真記録」はちらっと見ました。おそらく八千代さんと同世代の、当時の写真好きの若者たちが各テーマで撮影した写真を一冊の写真集にまとめた感じ。それが何冊か見られる。

たぶん、元々は高い金払って何百部とか作ったんじゃないかな。

今はそれも本人たち以外だと、どこかでひっそり保管されてるだけなので、インターネット上で少しでも多くの人に見てもらおうと思ったんだろうね。

内容は、彼女たちの世代の若者は非常に真面目なので、「学生運動」とか「ヒロシマ」「公害」といった社会的なテーマのものが多い。中には「動物」なんていうのもあるけど。

そして、それらはたぶん全てモノクロ。白黒フィルムの方が安いし、「芸術」といったら白黒写真だもんね。

まあ、五十年、六十年前の記録というだけでも貴重だよ。

正直言えば、下の世代の者からすると真面目過ぎし、中には「これは何を写してるんだ？」とキャプションなしなのでわからないものもある。

全部見たわけじゃないけど、タイトルだけでは内容が分からなかった「いわき市」の写真集は、今はたぶん存在しない鉱山や労働者の様子が撮影されていて良かった。

「学生運動」や「公害」とかは社会問題を告発するとか、反体制みたいな姿勢があるから、ともすれば「俺たちは正義なんだ」みたいな感じにも思えちゃうんだけど、こういう人々の日常をとらえた写真は、その時代を切り取った貴重な記録として価値があるんじゃないかな。

写真展の反応がイマイチなのも理解できるけどね。無料だから見るけど、アンケートに答えるくらいの気持ちがない人は、ちらっと見て終わりになっちゃうな。

'65～'79までの全日・491のアーカイブ作りは着々と進んでいます。お手持ちのネガや資料の情報をお知らせください。
お問い合わせ等：277-0053 柏市酒井根 2-20-11　東　闊　hig811@gmail.com

AAJPS Archives of Another Japanese Photo Stream
NEWS PAPER No.27　JUNE. 2024
一般社団法人 もう一つの写真記録

AAJPSのこれから

代表理事　福崎　進

◇これまでの活動

この1年余りAAJPSは多事多難な局面を経験しました。高齢化は避けがたい条件とは言うものの、多くの会員が離脱した影響は避けがたくあります。しかしここで立ち止まるつもりはありません

振り返れば7年前、様々な想いで「全日の足跡を世に残そう」と名乗りを上げた方々と任意団体ではなく、社会的な責任を負う一般社団法人としてこの社団を立ち上げました。

その目指すところは「1960年代以降の全日本学生写真連盟の様々な活動を調査研究し、その成果を保存するとともに広範な学術研究に資することを通じ、写真文化の発展に寄与すること」（定款第３条）です。

この目的達成に向けて十分とはいえないまでも様々な活動を展開してきました。

長年密閉状態に置かれて来たネガフィルムは、重度のヴィネガーシンドロームでストロー状に丸まったり、膜面がベースから剥離しかかっているものもありました。先ずはフィルムに写し込まれた映像をデジタルデータとして保存するためのスキャンを行い、通気性のないネガケースを交換するなど保存状態の改善を施す作業に着手し、現在も続行中です。

作業には「チーム長崎」「足尾・谷中プロジェクト」「ドキュメント・斗争等」「広島・基町チーム」「北海道101」「公害」「大阪撮影」「筑豊」「われわれの写真」のチームを編成して取り組んでいます。

一方AAJPSの活動は、長年日の目を見ないまま置かれていた名古屋女子大の『郡上』、立教大の『いわき1974-76』、大妻女子大の『立川』を写真集として世に出す動きを誘引しました。

また「ヒロシマ・基町チーム」と「足尾・谷中プロジェクト」は、この間の調査研究の成果を半世紀を経て取り纏め、撮影地での展示を実現したことで大きな収穫が得られました。広島、足尾、舘林の展示会場には予想をはるかに超える人々が“口コミ”で足を運ばれ、幼いころ、若い時の風景や知り合いと出会い、写真を前に記憶を呼び覚ます姿が感動的でした。そしてどの会場でも「この写真をぜひ残してください」と強く求められました。この経験で得られたのは「写真は開かれた世界で生きるものだ。人の目に触れなければ意味も価値も生まれない」ということです。

◇課題と目指す先

これまで作業チーム中心で進んできたこともあり、生成したデジタルデータやプリント、資料が各チーム内で持たれているのが現状です。AAJPSの目的達成には「見える化」を実現するデータベースの構築が必須です。

そのためには、チームごとに作成しているデジタルデータと原資料を収録したフィルム目録、プリント目録、資料目録を集約する必要があります。今年３月に目録類総点検のため各チームに報告を求め、期末現在「足尾･谷中」「長崎」「広島・基町」から報告が上がっています。

目録の統一フォーマットは用意していましたが、チームごとの作業の中で“創意工夫”が凝らされたこともあり、まずは全容を確認することから始まります。

その上で、

① 原資料（ネガ、プリント、撮影資料、アピール・会報類）とそのデジタルデータすべての所在を確認し、フェールセーフに基づくオリジナルデータの集中管理を実現する

② 各チームは写真や資料整理の結果をデータベースに必須のメタデータ（「いつ」「どこで」「だれが」「なにを」などの情報）として拡充した“見出し（Index）データ”目録に落とし込む

―ことへと進めていきます

◇「見える化」の最終形に向けて

最後に、ホームページ（HP）の内容点検と見せ方の工夫に取り組む必要があります。

HPは不必要な「黒塗り」解消を理事会決定したものの未着手の状態にあります。またキャンペーン1965の会報１号など新発掘資料の追加もできていません。

またHP発足に当たり不快語や差別用語、人権に配慮した用字用語の整理を行いましたが、見直すべきではないかとの意見がありこれも検討課題です。

更に、AAJPSの活動を伝えるショーウィンドウは設けていませんが、これまで積み重ねてきた成果をHPで見える化しようとの希望も寄せられています。

こうした課題をどのような形で実現できるか。HPとデータベースをどう組み合わせてアーカイブスを実現するか。

ここは専門的な知識技術をお持ちの方に協力を求め、実現可能な姿を探りたいと思っています。

AAJPSホームページ　https://aajps.or.jp

第１次長崎セレクト合宿報告　小川　茂

5月17日～20日奈良県「生駒ふれあいセンター」に於いて、「第一次長崎撮影行動」の写真セレクトを行いました。参加メンバーは、西垣・大出・高畑・小川と福崎代表の5名です。

合宿中　写真を広げて地域別に整理

「第一次長崎撮影行動」は1972年9月4日～9日、全国から参加98名で長崎を撮影し、その本数は456本です。100人の人間が市内をくまなく歩き写真とメモに残しました。その後ネガは眠ったままでしたが、第1次セレクト合宿を2017年9月神戸市しあわせの村で行いました。ベタチェックコマ約3000枚を1班から10班の撮影者別にセレクトし、現在Z-アーカイブに759点掲載しています。

立神から長崎駅方面を望む

今回その掲載写真759点を撮影地（町別）に仕分けを行い、検討・セレクトしています。100人近くの人間が長崎の街をくまなく歩き、多種多様な写真があります。

53年前私たちが出会った長崎がここにあります。坂道が多い長崎の街・板張りの住宅・洗濯物が干された庭・人々の生活の匂い・路地で遊ぶ元気な子供たち・おばさんたちの元気な声が響く市場・立神などの長崎湾の西岸では三菱造船の他に小さな造船所が多くあり、夕方になると近くの飲み屋では工員でいっぱいになり、うまそうに酒を酌み交わしている。街中を路面電車が走り、丸山花月にも行き、浦上天主堂は観光客が多くいた、十字架山に登り長崎の風を感じた、すり鉢状の街を狙って俯瞰を数多く試みたが決まらない。

古川町　山本造船所長崎湾には、このような小さな造船所が幾つもある

全日初参加の1年生も多く、中々写真になっていないのもありますが、ココには100人が見た、出会った、触れた、長崎があります。いまあらためて見ると当時の記憶が蘇ってきます。

浜町交差点　中央橋から思案橋方面を望

良く撮れていると思われる写真だけでなく、いろんな意味合いを持たせ幅のあるセレクトを行いました。今回セレクトした写真は、後日サイボウズ・ファイル管理にアップする予定でいます。各自のどの写真がセレクトされたか、分かる様にしたいと思っています。是非ご覧ください。

平和祈念像前で記念写真

1ケ月後の1972年10月「第二次長崎撮影行動」を起こし、更に100名参加しています。1/4程度しか回収できていませんが、ベタチェックコマ1399点をセレクトし642点に絞っています。

涼しくなった10月頃、この642点をプリントし検討・セレクトしたいと考えています。第二次長崎は各個人がある程度自由に動いた記憶がありあます。1人1人が考え取り組んだ写真に期待でき、今回の1次のセレクト群の写真に、2次の写真を加え重ねると少し厚みが出てくると期待しています。

弁天町

1972年9月、長崎第一次撮影に参加された皆さん、あなたの記憶に長崎の断片は残っていますか？ あなたは長崎で何と出会いましたか？ どんな写真を撮りましたか？ 是非セレクトした写真を見て下さい。そしてあの日の事を思い出して下さい。

私達「チーム長崎」は、1次・2次・3次・4次と、長崎で何をしたのか？写真で辿っていきたいと考えています。

News Paper 27th　June　2024

AAJPSチーム「長崎」

「第１次長崎」検討合宿の感想　高畑登志子

十字架山ってこんな所、ブワーと風が吹いている

今回の合宿で今までと大きく変わったのは、これまで撮影者別にセレクトしていたものから、場所、事柄ごとに写真を仕分けて絞り込んだ事です。

長崎は、被爆地広島・長崎ということだけでは語れません。江戸時代のキリシタン弾圧、鎖国の間オランダや中国との貿易が認められた港であり、明治以降は三菱の軍需産業が長崎の街の大半を占めるという独特の歴史文化があり、町ごとにそれぞれの特徴を持っています。

第一次長崎撮影行動では、ゴキブリ作戦といって長崎をくまなく這いずり周り当時の長崎の様子を撮影、ルポしてまわりました。

浦上地区　石神町の祭礼を行う家の祭壇

例えば、平和公園・資料館・浦上天主堂のある浦上地区には、キリシタンが多く住んでいました。その地区の石神町で撮られた写真の中に、祭壇に命名と書かれた紙がずらっと並べて貼ってあり、その上にマリア様の絵を飾っているものがありました。「この命名札の裏に洗礼名が書かれているのではないか」という指摘があり、密着ベタを見直すとその家の外観から中の様子などまたその家も中の人もが撮られいて、「これは、隠れキリシタンの礼拝をする家ではないか？」という事が分かってきました。そこでセレクトされていなかったコマも見直してまとまったグループとして写真を残す事にした。また、寺町は、山手にずらっとお寺が建てられており、中国人が多く住む館内町は、江戸時代に出島と共に海外交流の窓口でした。その文化が長崎くんちの蛇踊りや卓袱料理などとして残っており、中国寺や唐人屋敷などが残っており、近くには新地中華街がある。また丸山は古くからの花街で、南山手はグラバー邸など洋館が並ぶ観光地として多くの団体観光客が訪れています。

寺町

戦時中朝鮮人労働者の宿舎とされる建物に住む人々

対岸の立神地区には三菱造船の30万ドックがあり、大きなクレーンが民家のすぐ近くまで伸び、平地は殆ど三菱が占めており民家は山裾から山手へと追いやられています。

立神　三菱造船工員

長崎はカソリックの信者が多く住む地である事の影響からか、市民のABCCに対する反応が広島とはずいぶん違う。当時私たちは広島と長崎の違いに戸惑ったり、試練のように体験を語る被爆者の話を聞いて、どう受け止めて良いのかわからない苛立ちを抱えた記憶があります。他にもそれぞれの歴史を持つ地域が沢山あり「長崎」はどういった写真を残せば良いのか、一つ一つ写真を見ながら考えていきたい。

今回の活動を始めるに当たって読んだ1975年8月6日発行の「広島・長崎30年の証言」に

1968年朝日新聞が全国で原爆写真展を開催し、秋月辰一郎氏（聖フランシスコ病院院長、自身も被爆している）が東京会場に呼ばれて、長崎原爆の話をした。会場では、陳列された写真や資料が人々の眼を釘付けにした。だが、そこに並べられた書物には長崎のものは何一つなかった。全部広島原爆に関する書物だった。長崎の原爆のことは、広島の様に、峠三吉や太田洋子らの詩人、作家達によって広範に証言され、店頭にも並べられることはなかった。長崎の原爆については、出版されても1地方的局部に限られ、全国民の視野に入る機会は殆どなく、見捨てられてきた。また、永井隆博士の長崎の書物は出版されたが、そこには原爆の悲惨さは充分に書かれず、むしろ、原爆の災害の中でのカトリック信者の美談にウエイトがあって、原子野に生きる悲痛な記録や生活詩があったが、それらの全てが、経済ベースに乗らないとの理由で絶版になっている。

とありました。　↗